

研究の取り組み方について

本日の私の研究発表「企業の本質は何か：一般的理解とその問題点」は最近書いた論文（岡部 二〇〇八）に基づくものでした。その議論は以上で終わります。

最後に、いつものことですが、ひとつ簡単な説教をさせてください。それは大学院生の皆さんにとって最大の仕事、すなわち研究活動と論文の執筆をする場合に参考にしていただくため、私が有用であると考え、また体験的に信じていることを皆さんにお伝えすることです。それは、これまたいつものことですが「三点」からなっています。それらを私の体験を踏まえつつ紹介いたします。

第一は「継続は力なり」、第二は「量は質に転化する」、そして第三は「すべてのことに時がある」です。

継続は力なり

まず、継続は力なり。これは、簡単なことでもよいがそれを継続していくことの大切さを意味しています。

例えば、論文や書物を読もうとする場合、いつの日にかまとめて全部を読む予定でコピーをとって積んでおくのではなく、論文を一本ずつでもよいから毎日こつこつと継続して読み進めて行くことです。その場合、単に読みっぱなしにするのではなく、必要なことをメモし、それを（例えば私の場合）テーマ毎に封筒に入れていくなど、荒っぽくてもよいからある程度の整理を同時に行ってゆくことが大切だと思います。人間の記憶能力には限界があり、また記憶は知らず知らずのうちにゆがんで行くことが知られているので、こうしたメモは不可欠です。そうしたメモ自体は研究の蓄積であり、またそれを作りだそうという習慣を付けることが研究者の実力の一つになるといえます。

これに関連して、私の仕事スタイルを一例として紹介しましょう。私は、特別な事情や公務等のない限り（一）朝一〇時に大学の研究室に到着すること、そして（二）午前中の二時間はエネルギーを要する仕事（論文執筆、各種の企画、論文の読み込みなど）に割り当てること、この二つを最優先した生活パターンを習慣づけています。こうした生活を毎日継続しているおかげで、大学教員として充実した毎日を送ることができている、と考えています。

簡単なことでも毎日続けるのは予想以上にたいへんです。しかし、何ごとに取り組むにせよ、それは最も基本的なことなのです。

量は質に転化する

二番目は、量は質に転化する。単純なことがらでも、それが多量になればもとの要素とは別の性質をもつもの（通常はより次元の高いもの）に変質すること、それがこの意味するところでは。まさに「塵も積もれば山となる」、すなわちとりたてていべき特徴を持たないチリでも、多量になれば山という全く異次元のものに変質する、というわけでは。

私が身をもって経験しているのは、単発的な論文を書きそれをワーキングペーパー（暫定論文）として残すという作業を積み重ねて行くことです。そうすれば、最終的には予想外にもそれが一冊の書物になる、といった発展を遂げるのです。つまり、ワーキングペーパーであっても、それが四～五本たまれば自然に何らかの相互関連を持つ一つの研究成果のかたまりとなり、あとは総論ないし序章を付け加えるだけで一冊の本になることが不思議にも見えてくるのです。

当初から「一冊の本を書いてやろう」という意気込みで出発すると、私の場合、途中で挫折するのがこれまでの例でした。しかし、一つの研究作業を終えた段階で、とりあえずワーキングペーパーというかたちで区切りをつけておく、という対応をするだけならば、まずずいぶん気が楽になります。そして、そうした作業を継続して行けば、そのうちにワーキングペーパーの集積体ができていきます。しかし、驚くべきことに、その段階になればそれはもはやワーキングペーパーではなくなり、書物といういわば一つ次元が高いものに自然になってしまうのです。これは実に不思議な体験であり、いつも驚かされています。

私の経験をより具体的にいえば、昨年出版した研究書『日本企業とM&A』（東洋経済新報社）がこれに該当します。私は、これまで金融システムや企業行動といったテーマに関してワーキングペーパーを何本か作ってきました。一方、研究会（ゼミ）の学生諸君が執筆したタームペーパー（学期論文）のうち、周到な統計的分析がなされているものをゼミ生と私との共著論文のかたちでワーキングペーパーにする、ということも二～三年継続してきました。

すると二〇〇六年の春頃、これら両方のワーキングペーパーが合計五本蓄積しただけでなく、これら相互間を自分がかつて出版した書物の内容を援用してつなぎ合わせれば、体系的な日本企業論になるのではないかと、というアイデアをふと思いついたのです。そこでそれらを一体化する作業を七～八か月間かけて行うことによって、四百ページ近いこの書物を刊行することができたのです。当初からこのような大冊を計画していたとすれば、荷の重さに耐えかねてとても完成はおぼつかなかったと思います。まさに、量は質に転化した、というのがこの本の刊行に関する最大の感想です。

すべてのことに時がある

三番目は、すべてのことに時がある。これは旧約聖書（コレヘトの言葉）にある言葉であり、以前ここでも紹介したのですが、私が常に大切にしている考え方です。

皆さんにとって修士論文を書く時としては、修士課程二年生にとっては今年一年限りであり、一年生にとっては来年一年限りです。また博士後期課程の皆さんにとっては三年間ありますが、それは一生に一度です。

いずれの場合でも、体力と思考力が皆さんの年齢におけるほど充実している時は、長い人生において他にありません。物理的には同じ一年間であっても、二〇歳代の一年間と三〇歳代あるいは四〇歳代の一年間を比べると、質的に全く異なります。皆さんにとって、ほんとうに研究成果を思う存分伸ばすことができるのは、この時期において他にありません。このことを決して忘れないで精進してほしいと思います。

そのような努力を重ねていれば、ある日突然、思いもかけずに良いアイデアあるいは発見が訪れる可能性があるのです。私もこのことを頻繁に経験しています。前述したように、それまでの成果を一冊の書物にできるのではないかということが、ある日ひらめいたわけです。こうしたひらめきは、最近、セレンディピティ (serendipity) としてよく話題にされるようになりました。

これに関して、フランスの細菌学者ルイ・パスツールの有名な言葉があります。すなわち "Le hasard ne favorise que les esprits préparés"、英語では "Chance favors only the prepared mind" です。日本語では「幸運の女神は準備された心のみ訪れる」という表現がぴったりと当てはまります。ここで重要なのは、何かを単にまったく「偶然に」あるいは「幸運にも」発見する、というのではなく、その前段階として非常に多量の勉強、思考、ないし情報インプットをしておけば、そしてその場合に限って、突然に発見がありうる、という点です。

最近の脳科学の成果によれば、脳は人間が眠っているときにも情報の整理を進める作業を継続しており、その結果として何かのきっかけで新しい気づきないし発見が生じるとされています。逆に言えば、何もインプットしていない頭に突然何か重要な発見がもたらされる、などということはありません。

結論

以上から明らかなように、研究は一日二十四時間を通しての全力作業なのです。そのような認識に立ち、皆さんに具体的なアドバイスをしておきたいと思います。

一つは、猛烈なインプット、すなわち先行研究の渉獵をすることです。確かに、先行研究にこだわりすぎると良い発想が出てこない、あるいはそれは独創的な研究にとって弊害がある、という意見も時々聞かれます。しかし、そのようなことを問題にする前に、まず基本的な先行研究は全部きちんと理解し、批判的検討をしておくことがまず重要だと思います。

二つは、寝ても起きても、そして乗り物の中でも、あるいは歩行中でも常に研究課題のとっかかりを追求するという姿勢を持ってほしいことです。幸運の女神はどこで皆さんにほほえみかけるかわかりません。その準備をしておくことが大切です。メモできる用紙を常時身につけるなどして、アイデアを瞬時にメモする習慣をつけることです。

これに関して、私が採用している方法を一つ参考までに紹介しておきましょう。それは、鞆の中に常時白い大きな（A4サイズの）用紙を五～六枚入れて持ち歩いていることです。私の場合、なぜかわかりませんが（多分就寝中に脳が働いてくれた結果だと思えますが）あさ自宅から駅まで二〇分間歩いている時に、良いアイデアを思いつくことが少なくありません。そうした場合、アイデアはすぐに逃げてしまう場合が多く、メモしなかったのであとになって思い出せず苦い思いをすることがあります。このため私は、電車に乗ってからそれをメモするのではなく、ただちに歩くことを止めて道ばたに寄って立ち止まり、鞆のなかから用紙をとりだしてアイデアを走り書きをするようにしています。

以上、何かヒントになるかと思い、私の個人的な方法を述べました。皆さんにおかれては、それぞれ独自に有効な方法を見つけ出してください。そして研究成果を立派な修士論文あるいは博士論文として結実されんことを心より期待しています。

（慶應義塾大学 大学院セミナーにおける発表、二〇〇八年六月二十五日）